

追補4

吉田川の改修工事

吉田川は、鶴田川等と同様に品井沼に注ぎ込み、そこからは小川となり鳴瀬川に流下していった。

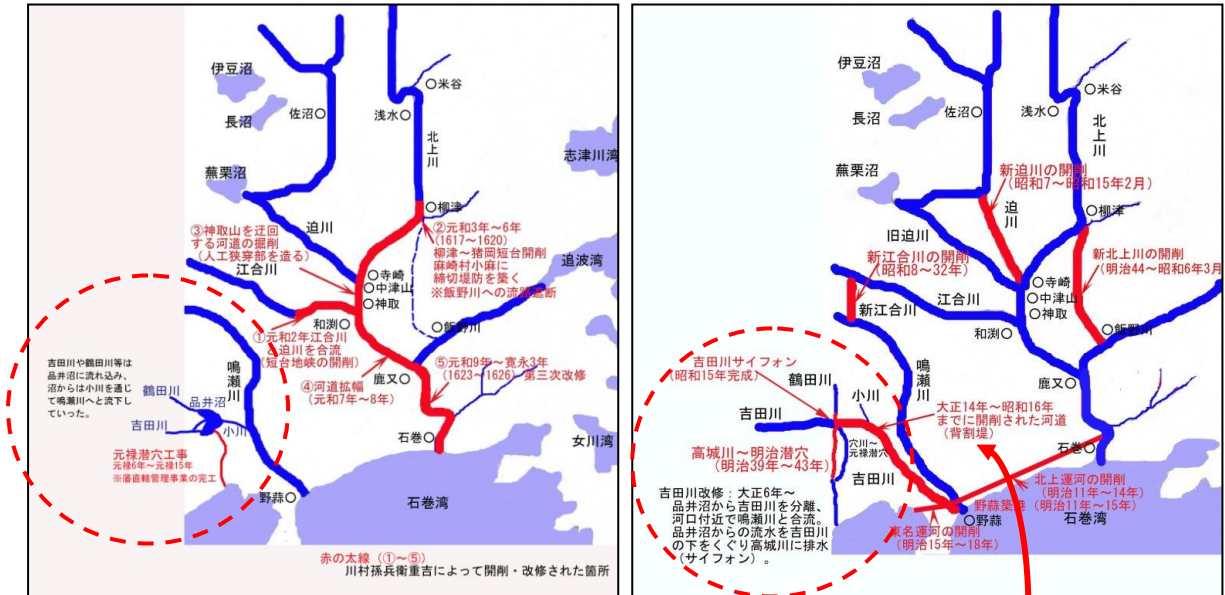
▼原始河川



吉田川改修の目的は、この川を品井沼から分離し、河口付近で鳴瀬川本流と合流させることによって、品井沼一帯の洪水被害を軽減しようとするものであった。

▼元禄時代の改修(赤○部分)

▼明治以降の改修(赤○部分)



(注) 吉田川サイフォン(幡谷)から先の新吉田川開削は昭和7年～8年

改修計画は大正2年ころから検討されてきたが、大正12年(1923)に「河川法」による国直轄河川としての吉田川改修計画が整い、大正14年(1925)下流部の築堤工事から着工された。

### <計画概要>

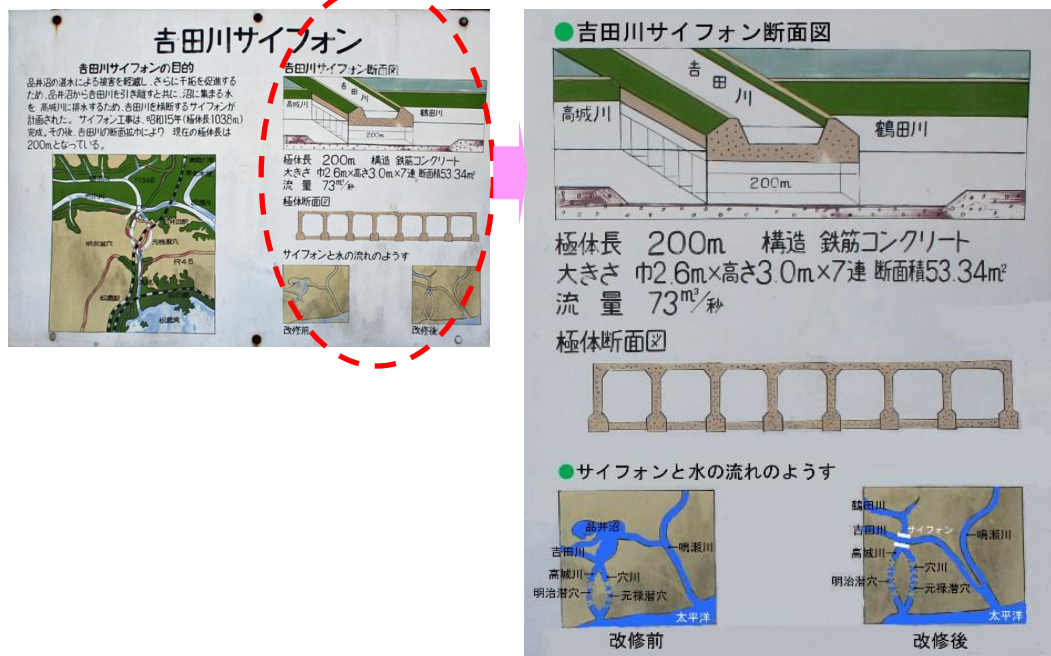
- 黒川郡落合村から小川落口二子屋を経て鳴瀬川に沿って河口の野蒜に至る新川の開削 (17,600 間(32km))
- 計画高水流量: 560 m<sup>3</sup>/s、川幅: 50~60m、堤防高: 7.96m 水面勾配: 1/3,000~1/5,000)

沼の排水は、サイフォンを新設し、吉田川をくぐり高城川へ行くこととした。昭和 7 年 (1932) 着工、昭和 9 年竣工。

### <サイフォンの概要>

管体長: 103.8m、鉄筋コンクリート造7連(2.6m×3.0m) 流量 73 m<sup>3</sup>/s

(注)後に吉田川の拡幅に伴い、現在では 200m となっている。



これらの工事によって、昭和 15 年には吉田川は沼から完全に分離改修された。

しかし、その後も昭和 16、18、19、20、22、23 年と、相次ぐ異常出水による大災害によって吉田川は決壊し、その復旧に追われた。

※昭和 22 年 (1947) カスリン台風、昭和 23 年アイオン台風

このため、吉田川改修計画を抜本的に見直し、計画高水流量を 1,200 m<sup>3</sup>/s、川幅: 150~160m、堤防高: 10.48m とした。

吉田川の拡幅に伴い、サイフォンの管体も 47m 継ぎ足され、合計 150.8m となり、昭和 27 年に最も緊急を要した中流部の工事が完了した。(現在は 200m)

その後、旧堤の取り払い、新堤の仕上げ、橋梁の継ぎ足しなどの工事が昭和 29 年まで行われ、第一次暫定断面による築堤が完了している。昭和 30 年以降は下流部の工事が主となり、昭和 35 年からは上流部の改修に着手し、現在も続けられている。

▼昭和 4 年の品井沼と吉田川・小川・穴川 (出典：品井沼干拓抄誌)



▼現在の吉田川と昔の小川 ※小川が鹿島台町と松島町の行政界であったことから一部推測

